

KOBUNSHA BUNKO



書下ろし
長編ハードアクション小説

おお
やぶ

大藪春彦

謀略の

滑走路



光文社文庫

長編ハードアクション小説

謀略の滑走路

著者 おお大 やぶ藪 はる春 ひと彦

昭和60年9月15日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫
印刷 大 日 本 印 刷
製本 大 日 本 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Haruhiko Ōyabu 1985

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70207-4

Printed in Japan

光文社文庫

書下ろし・長編ハードアクション小説

謀略の滑走路

おお やぶ
大藪春彦

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

目 次

プロローグ

第一章 崔老人^{チエ}

第二章 戦争捕虜博物館

第三章 取引き

第四章 国家公安委員長

第五章 北朝鮮工作員

第六章 武装ヘリ襲撃

7

1
8

3
6

4
7

6
2

1
0
4

1
3
2

第七章 軍事トンネル

1
5
3

第八章 七千五百億円のダイヤ

1
7
3

第九章 裏切り

1
9
5

第十章 ダイヤの行方ゆくえ

2
1
4

エピソード

2
3
7

解説 木村譲二

2
4
0

この作品はフィクションであり、現実の国家、組織とは一切関係ありません

プロローグ

1

星島弘は、ニンニクとキムチの臭いが漂う深い息をはいた。星島の吐く息の音だけがあたり
の静寂を破るほど静かな鉄原盆地だ。

三十五年前の朝鮮戦争で最も激戦地であったこのあたりは、“鉄の三角地帯”と呼ばれ、西
方山を中心にして鉄原、金化、平康の三つの町に囲まれた地域で、国連軍と韓国軍に多大な損
害をもたらしたところから、その名がつけられた。

防寒具の上からベルクロのベルトでつけた米陸軍の最新ミリタリー・ウオッチ「コンバット
・コミュニケーション」のデジタル文字が、やがて午後三時を示そうとしている。

米陸軍は、近い将来にすべてのミリタリー・ウォッチを、「ウォッチ」と呼ばず、すべてコンバット・コミュニケーションに変える予定で、アリゾナのバーデュー大学のW・A・タッカー博士に依頼して開発を進めていた。

この腕時計タイプの^{コンバット・コミュニケーション}Cは、試作型^{プロトタイプ}が二十個作られ、エルサルバドルの軍事顧問団、ヴェトナム戦争当時の米軍捕虜の捜査を続けるようラオス、カンボジアの特殊部隊員、米陸軍ナティック研究・開発研究所の北極テストセンター(USATC)などで実用化テストが進められている。

このC・Cは、戦場での兵士、特に陸戦の歩兵のために開発されたものだ。

戦闘中の兵士が負傷しても戦場の混乱の中では、充分な手当ても受けられない。そうした時に、このC・Cをつけていれば、負傷して動けなくなったり、味方と離ればなれになった時でも、ある程度は安心だ。

もし重傷を負って、自分でC・Cを操作できない時でも、手首の皮膚に密着しているセンサーが、自動的に生命サインの変化を読みとってくれるようになっていて。

また体温、脈拍のほかに、倒れている場所の位置を知らせる電波が発せられる。信号はトラックやヘリコプターに搭載されたインターロゲーターで受信され、すぐに本部に連絡されてし

かるべき処置がとられるようになっていたのだ。

C・Cが重宝なのは、エマージェンシー・シグナルを発信するだけでなく、アウトドア男たちが泣いて喜びそうな機能が装備されていることで、マルチプル・パーパス・ウォッチの決定版といえる。

主な装備はレーザー・ジャイロINSと連動した超高精度3Dマッピング表示システム、単分子繊維チェーン・ソー、衛星放送受信及び表示パネル、気圧計、高度計、血圧計、金属探知器、シグナル・ミラー等々、時計としての機能を含めれば三十種類もの機能を持っている。

2

コンバット・コミュニケーションターのデジタル文字は、刻々と三時に近づいていく。

星島は祈るような気持ちであった。どんよりとした空からなんとか太陽が顔を覗かせてくれるように……。

星島はまた、緊張感で胸が爆発しそうであった。三年間をかけて計画をねり調査をしてきたプロジェクトが間もなく幕を開けようとしているからだ。

星島は、防寒用の米軍サヴァイヴァル・コートの胸からマールボロ・ライトを取り出して口

にくわえる。

緊張と零下十八度という厳しい寒さのために口唇は乾からびたようになっていた。舌で唇を湿しフアイヤー・スターターを使ってタバコに火をつける。

かたわらに座するようにして軽い寝息をたてている金少尉の様子をうかがう。

星島は広報将校としてエスコートしている金少尉に特殊なコーヒーを飲ませたのだ。

コーヒーには、コカインと、南部メキシコの山間の僻地に野生している「魔法のキノコ」の成分を抽出して作った粉末が入っている。

米軍の特殊部隊グリーン・ベレーが使用しているのと同じものだ。

このキノコは一種の興奮剤の役目を果たすが、適度な量は、感覚を麻痺させ陶酔の気分と軽い失神を惹き起こし、約十分間の失神中に起こった出来事はすべて忘れてしまうというものだ。かつてC・I・Aがこの薬に目をつけ、ある大学の研究室に多額の金を研究費として提供して、その化学的合成に成功したものだ。だから十分間の間に星島が仕事を済ませれば、ここで起こった事は金少尉には何も分らないはずだ。

鉄原の高原に粉雪が舞いだした。薄曇りの厚い雲の下から鈍い太陽が顔を出し始めた。星島の口は緊張で無性に乾く。

三時ジャスト。星島は手にした朝鮮戦争当時の古い地図から目を離して、前方のK 50とK 51あたりを見る。

冬の鈍い太陽が、草木の生えていない岩肌をくつきりと浮かびあがらせている。

突然、両方の岩山の谷になっているあたりから鈍い発色の光りが輝いた。

「やった、ついに発見したぞ」

星島は、崔老人^{チノ}にいわれた通りに、丘の下に鉄骨の残骸を残す鉄原駅の屋上にあたる位置から谷間に向けて、凍りつかないように油抜きしたニコンのシャッターを切り続けた。

ポケットに入れておいたポラロイドカメラでも、急いで一枚シャッターを切り、出来上がった印画紙を二つに折ってジャングル・ブーツの底にかくした。

たった十秒間くらいだったが、鈍い白色の光りは最後に大きな虹^{レズ}になって消えた。

星島の本彫りの面のような表情に、はじめて不敵な笑みがもれた。

ついに確認したぞ。あの三十億ドルのダイヤは必ず自分のものにしてみせる……。

3

星島は二分間待った。そして赤土に滑ったふりをしながら金少尉の上にわざと倒れた。

「金少尉、よい写真が撮れましたよ」

会話は英語で行なわれた。

韓国では、大学を卒業している若い人のほとんどが英語を話すといっているくらい英語が盛んだ。日本語は二番目に人気がある。

「そうですか？」

と金少尉は少しキョトンとしている。自分が十分間くらい失神していたことは分らないらしいが、なんだか少し様子が変だなという顔をしている。

星島は、自分の企みたくらが分らないように次々と話しかける。

「おかげさまで、すぐくよい写真が撮とれましたよ。朝鮮戦争から三十五年もたつのにまだこんな戦争の傷跡が残っているんですから。僕はこの傷跡のイメージと夕陽をダブらせて、戦争の悲惨さと、平和の大切さを世界中に訴えたいんです」

「そうですか、目的を果たせられましたか」

「ええスクープものです。ソウルはオリンピックも近いし、これがアメリカの週刊誌ウイクリーU・S・Aを飾ると、大反響を呼びますよ」

星島はさんざんお世辞をならべたてた。金少尉はすっかり気分をよくして、自分が十分間ほ

ど失神していたことはまったく分らないようだった。

この時、突然DMZ（非武装地帯）の北側の北朝鮮軍の監視所の拡声機から「アリランの歌」がものすごいヴォリュームで流れてきた。

続いて韓国語と英語で、

「南朝鮮カイライ政権の手下とその友人たちよ。独裁の祖国を捨て、偉大なる首領様の保護のもとに全国民が明るく……」

と、例の宣伝を始めた。拡声機の奇妙なアクセントの英語が、冬の広大な盆地に冷えびえとひびき渡る。

「チエツ——」

と舌打ちしてペツと唾つばをはいた金少尉は、

「ミスター星島、またいつものが始まった。さあ帰りましょうか」

「OK、金少尉、ソウルに帰ったら今度はマツカリドブロッカとメイクメイクチヨウチヨウで、とことんやりましょう」

「カムサハムニダありがと」

二人は丘の上から降りると、待たせてあったジープに機材を積み込んで前線司令部に戻った。

前線の師団司令部では、若い兵士たちが夕食の準備をしているところであった。大きなテールにはキムチ、ガグテギ、チリメンジャコの佃煮、明太の煮つけに大盛りの麦メシという献立が並ぶ。

キムチは、各前線の部隊が全部自家製で造っているという。それにしても米軍にくらべて貧しい食事だ。

キムチは韓国の漬物の総称だ。ひと冬保存するものから、一夜漬けて食べるものまで百五十種以上はあるといわれている。

日本では単純に朝鮮風の白菜の漬物をキムチと呼んでいるが、白菜はペチュキムチ、キュウリのはオイキムチ、大根のものはガグテギと、正式にはキムチの上に材料の名前をつけている。

キムチというと日本人は、ニンニクや唐辛子が主な味と思い敬遠する人がいるが、決してそんなことはない。

味の決め手は「塩辛」である。アミ、ヒシコイワシ、タラ、タラコ、イカ、カニ、ハマグリ、

カレイ、アワビなどの新鮮な魚介類に塩を加え、熟成発酵させた塩辛が、キムチの“だし”の役割を果たしている。

さらにリンゴ、ナシ、スイカ、松の実、青ネギ等が加えられ、芳香、刺激、色彩がたくみにブレンドされている。ニンニクや唐辛子は魚介類で作った塩辛の生臭みを消すための香辛料と考えた方がよい。

だから、あの独特のうまみがでて、ビタミンやカルシウムなどのエキスがたっぷりと汁に入っている。韓国では、キムチは洗わずに漬けた汁も全部食べるし、鍋もの、煮もののだしとして使われる。日本人のようにキムチを洗って食べたなら、たんに白菜のカスを食べているようなものだ。

このあたり抱川ポチョンは、白菜の有名な産地でもあるので司令部では各隊に指令を出して、小さなキムチ工場を作り、自家用に作らせている。またあまったキムチは石油缶やアルミ缶に密封して他の師団に売りこんだり、民間の業者に売りこんで日本への輸出にまわされたりして、割りのよい小遣いこづかいかせぎになっている。

星島はキムチの臭いにおいのする廊下を通して全少将チヨンの部屋をノックした。全少将は星島が取材の世話になるからと東京から持ってきたカシオのポータブルTVと、兵士たちにはソウルで買